

## [ 試験紹介 ]

# 単棟ハウスにおける暑熱対策技術の確立

本県では豊富な日照時間や地下水といった恵まれた自然条件を生かし、いちご・にら・アスパラガスを中心に、単棟ハウスによる施設園芸が盛んに行われています。しかし、近年は夏季の高温をはじめとする気候変動の影響により、特ににらやアスパラガスのような生育期間の長い品目では、夏季だけでなく、冬～春の収穫物においても収量・品質の低下が発生しています。

さらに、ハウス内の高温化は作業者の身体的負担も大きく、労働生産性の低下や、雇用者確保が困難になるなど、経営面への影響も生じています。

そこで本試験では、肩換気や細霧冷房ノズル（商品名：クールネットプロ）等の暑熱対策資材を組み合わせることで、日中のハウス内気温を外気並に低下させる技術の確立を目指します。併せて、ウォーターカーテンを活用し、夜間のハウス内温度を外気以下に抑える技術についても検討します。

昼夜を通じた総合的な暑熱対策により、夏季のハウス内環境を改善し、作物の安定生産と収量・品質の向上、さらには作業者の負担軽減を図ります。

(野菜研究室)



写真1 クールネットプロ



写真2 ウォーターカーテン

## [ 試験紹介 ]

# 紫外光を用いたクビアカツヤカミキリ防除技術の検討

クビアカツヤカミキリ（以下、クビアカ）は、モモやウメなどのバラ科樹木を加害する害虫で、幼虫が樹木内部を食害することにより樹勢を低下させ、最終的には枯死に至らせます。

現在、クビアカの防除対策は薬剤散布が主流となっていますが、薬剤抵抗性の発達が懸念されており、薬剤に依存しない新たな防除技術の開発が求められています。

そこで本研究では、クビアカが紫外光に対して特異的な反応を示すことに着目し、紫外光照射による防除技術の有用性について検討しています。具体的には、波長の異なる紫外光（385nm、395nm、405nm）を成虫および卵に照射し、成虫の忌避・誘引行動や卵のふ化が抑制される照射時間について調査を行っています（図1）。

今後は、実際のモモ園地において紫外光を照射し（図2）、成虫の行動反応や産卵数への影響を調査することで、紫外光を活用した効果的な防除方法の確立を目指します。

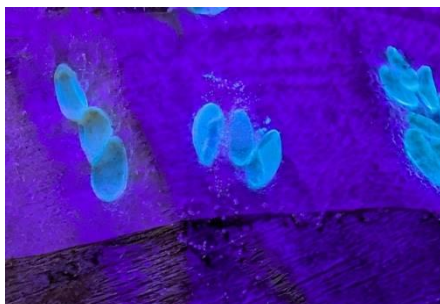


図1 紫外光照射で発光するクビアカの卵



図2 ほ場での紫外光照射の様子

(病理昆虫研究室)